

「茱萸」と「ぐみ」

寺井泰明

I. はじめに

「ぐみ」という赤い実のなる木がある。この「ぐみ」は「茱萸」と漢字表記されてきた。昭和初期の代表的国語辞典『大言海』^{*1}の「ぐみ」の項には「常ニ茱萸ノ字ヲ用キル…」とある。このように「茱萸」と表記し「ぐみ」と訓読するのはなぜか。この漢字表記あるいは訓読が“誤り”であることは既に識者によって指摘されている^{*2}が、未だに“誤読”“誤表記”は払拭されていない^{*3}。そこで、“誤り”に至った経緯を追究し、併せて日本語における漢語の受容法について考えてみたい^{*4}。

さて、なぜ誤ったかを追究するには、まずは日本語の「ぐみ」と漢語「茱萸」の意味を明確にしなければならない。以下には植物の名称を表記することが多くなるが、学名に対応する標準和名はカタカナで表記し、伝統的に用いられてきた曖昧な呼称は平仮名で、「ぐみ」のように表記することとする。^{*5}

II. 「ぐみ」

1. 日本の「ぐみ」

日本語の「ぐみ」はグミ科グミ属の植物を広く捉えているものである。グミ属の植物は約60種が東アジアを中心にして、ヨーロッパ南部や北アメリカにも分布するが、日本には15種ほどが自生するという。よく見かけるものでは、ナツグミ、アキグミなどの落葉樹と、ナワシログミ、ツルグミなどの常緑樹がある。

おしなべて、球形で赤熟する果実が特徴的で、食用となり、また漢方では下痢止めに使われる。それ故、「ぐみ」の語源についても、“コミ（小子）の義”^{*6}とか“キミ（黄実）の転”^{*7}といったふうに、果実に注目した説が多い。果実のほかには、葉の裏が褐色か銀色に光り特徴的であるが、材が強靱で農具の柄となる有用の木でもあり、人家近くに好んで植栽されてきた歴史がある。

2. 「ぐみ」の漢名

i) 学名による同定

「ぐみ」の日本での代表種はナワシログミ（学名：Elaeagnus pungens）である^{*8}。常緑生で刺があり垣根などにも利用されるが、秋に花が咲き翌年の苗代の頃に実がなるので、この名がある。日本では関東以西に分布するが、中国でも華中、華南に自生する。『中国高等植物図鑑』^{*9}などによれば、学名に対応する漢名は「胡頹子」（別名：盧都子、羊奶子）である。

ナワシログミ以外の「ぐみ」では、ツルグミ E.glabra は「蔓胡頹子」（抱君子、桂香柳）、アキグミ E.umbellate は「牛奶子」（甜棗、麦粒子）、ナツグミ E.multiflora は「木半夏」（四月子、牛脱）にそれぞれ対応する。

日本でナワシログミが代表的自生種であるのと同じく、中国でも胡頹子がこの属の代表種らしく、グミ科グミ属は胡頹子科胡頹子属と称される。また、日本で「ぐみ」がこの属の総称のように使われるのと同じく、中国でも「胡頹子」がこの一群の樹木の総称として慣用的に用いられる。

ii) 「胡頹子」の受容

漢語「胡頹子」の日本語への受け入れ方を古辞書類で調査してみると、まず、『倭名類聚抄』^{*10}には、

胡頹子 馬琬食經云、胡頹子 [毛侶奈里、養生秘要云、久美]

とある。『本草和名』や『色葉字類抄』においても、「ぐみ」「もろなり」といった訓が与えられている。この状況は近世に至っても変わらず、例えば寺島良安の

『和漢三才図会』も「胡頹子 和名久美、一名毛呂奈里。」^{*11}と記し、新井白石の『東雅』^{*12}も『倭名抄』を継承している。『東雅』は「もろなり」の意味にまで言及しているので、以下に引く。

胡頹子 グミ 倭名抄に、胡頹子はグミ、一つにモロナリといふ。…モロナリはすなはち諸生也。我国之俗、衆多をいひてモロといふ。其実の繁きをいふ也。

「もろなり」の称は現代の標準語からは姿を消したようであるが、「胡頹子」が古来一貫して、「ぐみ」と正しく認識され、正しく訓じられてきたことは間違いない。問題は、それにも関わらず「茱萸」も「ぐみ」に当てられたことである。

Ⅲ. 「茱萸」

1. 中国の「茱萸」

i) 「茱萸」の訓詁

「茱萸」がなぜ「ぐみ」に当てられたのかを明らかにするには、まず、漢語「茱萸」の意味を明確にしておく必要がある。

『説文解字』^{*13}は「茱」「萸」それぞれについて、次のように解説する。

茱 茱萸、茱萸屬、从艸朱聲。

萸 茱萸也、从艸臽聲。 [一篇下]

「茱萸」は「茱の属」で、単に「茱」あるいは「萸」とも呼ぶこと、「茱」も「萸」も形声字であることが述べられている。形声字においては声符がその字の主要な意義を規定することは多いので、ここでもその声符を検討しておくこととする。

まず、「朱」は「株」の原字であり、“木の幹”が本義であるが、「茱」においては後に明らかとなるが、朱色の義で、この木の実の赤さを捉えたものかも知れない。しかし、「臽」については、「臼」と「人」に従う会意字で^{*14}、両手で人を牽引する義であるが、この義が後に明らかになる植物としての「茱萸」とどの

ように関与するかは不明である。あるいは「茱萸」二音節ではじめて一語をなすもので、「臯」は単に発音記号と見るべきかも知れない。

さて、『説文』によれば、「茱」すなわち「茱萸」は「茱の属」である。では、その「茱」とはどのような植物か。『説文』は「茱」「萸」に連続して「茱」をとり上げ説解する。

茱 茱萸也、从艸赤聲。〔一篇下〕

主要義「茱萸」については暫し置くが、この字もやはり形声字である。また、その声符「赤」については、

赤 豆也、赤象豆生之形也。〔七篇下〕

として、豆の義の象形字であるとしている^{*15}。これも、植物「茱」の実の形が球形であることを捉えての字形かも知れない。

さて、「茱萸」に戻れば、段玉裁は『説文解字注』で次のような解説をしている。

「茱萸」は蓋し古語、猶ほ『詩』の「椒聊」ごとき也。單呼して「茱」と曰ひ、疊呼して「茱萸」「茱聊」と曰ふ。『唐風』^{*16}の「椒聊之実」、毛曰く「椒聊は椒也」と。^{*17}

「茱」を『説文』本文がいう「茱萸」だけでなく「茱聊」にも同じとし、『詩経』唐風の「椒聊」の類とする。また、この「椒聊」は「椒」に同じとするが、「茱・茱萸・茱聊」と「椒聊・椒」を「猶」字で関連づけてはいるものの、明確に同一とは述べておらず、「茱」と「椒」の関係がはっきりしない。しかし、段玉裁は「茱」が「艸」に従うことについて注し、『爾雅』『本草』『陸疏』などが皆、「茱」を木類に入れていることなどを指摘し、『説文』は古籀に沿ったものであり、「析言すれば草木の分が有」っても「統言すれば草も亦木なり」としている。これは字形に関しての常識的な判断であり、『説文通訓定聲』^{*18}も

茱 茱萸、从艸赤聲、字亦作椒 〔孚部第六〕

と述べている。結局、「茱聊」は「椒聊」と同じで、許慎によれば、「茱属」である「茱萸」は“椒の類（サンショウの仲間）”ということになる。

なお、「茱萸」の「萸」について『説文』は「茱」に続けて、

茱 檄茱實、裹如裘也、从艸求聲。(檄・茱の実なり、^つ裹んで裘の如きなり、
…)

と解説している。「檄」が如何なる植物であるかについては後に譲るが、「茱(椒)」に近い樹木と見て良い。「萸」については『爾雅』釋木にも「茱檄醜萸」(茱・檄の醜は萸)の一条があり、これについては伝統的な注から現代的解釈まで多様である。まず、郭注には、

萸、莢子聚生、成房兒。今江東亦呼萸萸。(萸は莢の子の聚生して房を成すの兒(貌)。…)

とある。『説文』「茱」の項で「茱萸」(椒の萸)として登場した「萸」であるが、ここでは「莢子」(茱萸の実)をも「萸」と称することが確認される。清・郝懿行は『爾雅義疏』*¹⁹で、

萸之言裘也，芒刺鋒攢如裘自裹，故謂之萸也

と述べ、「裘(かわごろも)」のように毛や刺などが生えて丸まった状態の果実をいうとしている。この解釈の影響は大きく、これを承けた現代的な解釈も多く行われている。

例えば胡奇光・方環海『爾雅訳注』*²⁰は「茱檄醜萸」を「椒、檄類的樹木、果実外皮密生疣状腺体。」と訳し、徐莉莉、詹鄞鑫『爾雅 文詞的淵海』*²¹は「椒樹、檄樹一類樹木，子実都有帶芒刺的外殼。」と訳している。

郝疏に代表されるこれらの解釈は、声符「求」が「裘」の原字であることに注目し、「萸」の本義に厳密ならんとした結果であろうと思われる。しかし、ここは山椒の実の形状からみて、郭注の「萸莢子聚生、成房兒(萸は莢の子の聚生して、房をなすの貌)」と捉えておくのが良さそうである。郝疏は「萸」の声符「求」の字形に捕らわれているが、「求」は「糾合」の「糾」にも通じ、一箇所へ集合する義を表すものと思われる*²²。王力は『王力古漢語字典』*²³で「求」について、「通“逖”。聚」と述べ、「逖」については「聚合」としている。『説文』の「逖」

説解は以下のとおりである。

述 斂聚也、从辵求聲。

また、『説文解字注』は

詩箋^{*24} 作掾。釋木「櫟其實掾」、皆卽萊字也

(『詩』の「箋」は「掾」に作る、「釋木」に「櫟、其の實は掾」、皆な卽ち「萊」字也。)

として、「萊」は「掾」や「掾」にも作るとしているが、『毛詩正義』は、『爾雅』釋木「荼檄醜萊」について李巡注を引いて、次のように述べている。

椒、菜莢皆有房、故曰掾。掾實也。

「椒」も「菜莢」も小果が集まり、丸い房になることを説明しているものである。

「萊」の意味を追究してきたが、『説文』の冒頭に戻れば、「菜 菜莢、菜屬」とあり、その「菜(椒)」については「菜 菜萊也」とあったわけだから、「菜莢」はサンショウ(山椒)に似て、小さな果実が丸く房をなす木であると結論づけられるであろう。もちろん、「菜」が「朱」を声符とするのも、「菜萊」と関連づけられるのも、その果実に注目されてのことである。椒(サンショウ)は実が調味料として有用であることは言うまでもないが、「菜莢」も、後述するようにその実が外見において目立つだけでなく、重要な薬効を持つのである。

なお、「檄」については『説文』に、

檄、似菜莢、出淮南、从木殺聲。

とあり、『爾雅』郭注は、

檄 似菜莢而小、赤色。

としている。いずれも「菜莢」に似ているとするが、郭注の表現からすれば、その果実が「菜莢」に似ていて小さく且つ赤いのであろう。但し、この「似」については異論も無いではない。『楚辞』離騷の「檄又欲充夫佩幃」(檄また佩幃(香囊)に充たされんと欲す)について王逸注は、

檄、菜莢也、似椒而非椒。

と記して*²⁵、楛を「椒」には似るが「茱萸」には似たものではなく、「茱萸」そのものと言いつている。呼称の厳密さについては、現代の「科-属-種」の分類法と学名や標準和名のレベルでは捉えきれない側面があるので、確かなことは言えないが、後に学名や標準和名での把握を試みることにする。

ii) 「茱萸」の文化

『礼記』内則に「三牲用藪」（三牲に藪を用ふ）とある。古代、牛羊豚を煮るに際し「藪」というものを調味料として用いることを記している。この「藪」について鄭玄注は、

藪煎茱萸也、漢律會稽獻焉。爾雅謂之楛。

とし、「煎茱萸也」としている。「爾雅」以下によれば、この「藪」が上記「楛」と同じものであり、「茱萸」とも同一または近縁の植物となる。ただ、名称には時代差、地域差のみならず、使用者の階層や使用場面による変化もあるので、古代の名称の意味範疇の判別には、必要以上に深入りしても意味がない。ここでは、「茱萸」あるいはその近縁の植物が、肉類を煮る時の調味料であったことを確認しておきたい。

前に引用した『爾雅 文詞的淵海』は、

至于椒，即花椒樹，楛，茱萸，都是帶有香味，可供藥用，也可用作調味品的樹木。

として、この『礼記』の一節を引用している。「楛」は「茱萸」に同じく、「椒」（現代中国語の「花椒」、日本語の「サンショウ（山椒）」に当たる）とともに香味があり薬用、調味料となるとしているが、次のように続ける。

在古人的觀念裏，芳香可以致神，所以祭神的酒食裏多用椒為香料。

芳香は神を致す効力があるので、祭祀用の酒食に多用されるだけでなく、辟邪の佩飾ともなる。前に引いた『楚辞』離騷の「佩幃」の「楛」もその事情を裏付けるが、民間には「茱萸」を身につけて魔除けとする風俗が広く存在した。多くの文献にその記述例が見られるが、以下にその一部を引く。

汝南桓景、随費長房遊学、謂之曰、九月九日汝南当有災厄、急令家人縫囊、盛茱萸繫臂、登山飲菊酒、此禍可消、景如其言、拳家上山、夕還、見鷄犬一時暴死、長房曰、此可代之。今人九月九日登高是也。

これは6世紀初頭ころの『続齊諧記』^{*26}の、重陽節の習俗の源を描いたものである。桓景が費長房の言に従い「茱萸」の入った袋を着け、高きに登り、菊酒を飲んだことにより難を逃れることができたとする故事である。また、周処の『風土記』には

俗尚九月九日謂之上九、茱萸到此日氣烈熟色赤、可折其房以挿頭、云辟悪氣御冬。

とある。こちらは赤熟した「茱萸」の実を髪に挿して悪気を避ける習俗である。李時珍『本草綱目』^{*27}は、この『風土記』のほかに、次のような話も収載している。

淮南万畢術云：井上宜種茱萸、葉落井中、人飲其水、無瘟疫。懸其子于屋、辟鬼魅。五行志云：舍東種白楊、茱萸、増年除害。

前半は「茱萸」の葉が井戸水で雑菌の繁殖を抑えていたと考えられる話である。このように見てくると、「茱萸」の気味が魔除けとして精神生活を支えただけでなく、薬品として、肉体の健康を支えていたことが分かる。現実的な薬効が致神辟邪信仰の根底に存在すると見てよい。

こうした「茱萸」への信仰を示す逸話は、『風土記』や『西京雜記』から『楚辭』などへと、次第に時代を遡って見出していくことが可能であり、源流の相当に古いことが確認できる。また、一方では『藝文類聚』や『太平御覽』などの類書に数多く引かれており、上記費長房の故事に至っては『五雜俎』や『蒙求』などにも、少しずつ形を変えながら登場する。「茱萸」信仰が庶民や子供に至るまで広く流布、浸透したことをうかがわせる。さらには、「登高」「菊花酒」「茱萸囊」「茱萸女」など、重陽の風俗を背景として「茱萸」を描いた詩歌は枚挙に暇無く、中には次の詩詞などのように人口に膾炙したものも多く、「茱萸」の信仰をますま

す浸透させたのである。

遙知兄弟登高處、遍挿茱萸少一人。〔王維、九月九日憶山東兄弟〕

明年此會知誰健、醉把茱萸仔細看。〔杜甫、九日藍田崔氏莊〕

茱萸香墜紫 菊氣飄庭戶（茱萸は墜紫を香らせ 菊氣は庭戸にただよ飄ふ）〔李煜、謝新恩〕

iii) 「茱萸」の現代名

「茱萸」の芳香と致神辟邪の効能は、本草（薬用植物）としての薬効に裏付けられていた。『本草綱目』は「茱萸」について、陳蔵器『本草拾遺』の説として、

茱萸南北綵有，入薬以呉地者為好，所以有呉之名也。

と述べ、「茱萸」の良質のものを、その産地に因んで「呉茱萸」と呼ぶことを紹介している。この「呉茱萸」については、既に『神農本草經』^{*28}にも、

呉茱萸、一名藪。味辛，温，有小毒。主温中，下氣，止痛，欬逆，寒熱，除濕，血痺，逐風邪，開腠理。…根，温，殺三蟲。久服輕身。生山谷。

とあり、その薬効とともに、「藪」と同一であることが示されていて、これが『礼記』の「藪」や『説文』の「茱萸」の説解に繋がる事が分かる。

さて、「茱萸」が重要な本草であるということは、その実体を把握するには絶好の条件となる。なぜならば、本草学の伝統的な知識、とりわけ生薬の名称は、まず第一に、病からの解放を願う民衆の現実的な需要を背景として、常に治療の実践から離れることなく、その生薬の実物とともにあったからである。名称と実体が乖離しては医療が成り立たない。また次に、生薬に関する知識は太古より絶えることなく伝承され、蓄積されて今日に至っているからである。『神農本草』の知識は、途中で多くの研究者の実践成果と知識を吸収しつつ、『本草綱目』に至り、さらに現代の中医学、薬草学にも繋がっている。生薬名は、常に実物を伴って、時には様々な民間伝承をも伴いつつ、現代にまで受け継がれてきたのである。そのお陰で、『爾雅』の「楸」も『説文』の「茱萸」も、現代の植物分類上の名称に同定することは比較的容易に、且つ正確に行われている。

『中薬大辞典』*²⁹や『本草綱目通釈』の〔現代研究〕などによれば、『説文』以来の「茱萸」は、学名を *Evodia rutaecarpa* (漢名：芸香科植物吳茱萸、標準和名：ミカン科ゴシュユ属ゴシュユ) とする一種と、これにごく近縁の数種を含めた植物である。ゴシュユはサンショウ属の「サンショウ (山椒)」と同じミカン科に属し*³⁰、『説文』で「茱萸」が「茱(椒)属」とされたことと合致する。

ゴシュユは、高さ3～4mほどになる落葉木で、中国南部を原産とし、長江流域から華南一帯と陝西などに野生する。しかし、日本には自生しないとされ、現在日本各地で栽培されているものは享保年間に中国から渡来したものの子孫とされる*³¹。全株に特異な臭気があり、初夏、枝先に緑白色の小花が集まって咲く。その小花が秋には扁球形で紫赤色に成熟し集合体をなす。味はサンショウに似て極めて辛辣で、各種の精油、アルカロイドを含むため、殺虫、抗菌等の効能があり、健胃、利尿などの薬用となる*³²。

なお、「藜」「檄」については、どちらもミカン科サンショウ属のカラスザンショウ (*Zanthoxylum ailanthoides* 漢名：芸香科樗葉花椒) に当てることが一般に行われている。『本草綱目』には「吳茱萸」のほかに「食茱萸」の項があり、「檄」「藜」「欐子」「辣子」などの別名を掲げたあと、陶弘景や李時珍自身などの次のような判断を記している。

〔弘景曰〕礼記名藜，而俗中呼為檄子，当是不識藜字也。

〔恭曰〕爾雅云：椒檄醜棗。陸璣詩疏云：椒，檄属也。

〔時珍曰〕…吳茱、食茱乃一類二種。茱萸取吳地者入藥，故名吳茱萸。欐子則形味似茱萸，惟可食用，故名食茱萸也。…礼記三牲用藜，是食茱萸也。

この、「吳茱萸 (茱萸)」と「食茱萸 (藜、檄)」を区別して、それぞれに学名を当てる分類法は、『神農本草経』が「吳茱萸一名藜」と言うような、「茱萸」と「藜」を区別しない見方とは、一見矛盾するが、そもそも「茱萸 (吳茱萸)」という名称自体が前述の如く、学名では一種に限定できない、異なった分類法に従ったものであり、どちらかが正しく、他方が誤りであるといった判定は必ずしも適

当ではない。

2. 日本での「茱萸」

i) 古代の「茱萸」

漢語「茱萸」が古代の日本でどのように受容されたかを、代表的な古辞書類で見えていくが、「茱萸」の仲間とされた「椒」の類を参照することとする。

まず、『新撰字鏡』（天治本）*³³を見ると、「秦榘(椒)」について以下の記述が見られるが、「茱萸」については、「茱」「萸」それぞれについて反切を示し、「茱萸」であることを記すのみである。

秦榘 八九月採實、陰干。伊太知波自加弥、又加波自加美 [卷七]

しかし、『倭名類聚抄』においては、次の如く和名が付される。

蔓椒 本草云、蔓椒 [伊多知波之加美、一云保曾岐]

吳茱萸 本草云、吳茱萸、[朱與二音、加波々之加美]

食茱萸 馬琬食經云、食茱萸、[於保太良]

また、当時の植物名の受容状況を知るには重要な『本草和名』*³⁴には、次の記載がある。

吳茱萸 一名藪、…和名加良波之加美

食茱萸 一名藪、…和名於保多良

秦椒 一名大枘、…和名加波々之加美

「吳茱萸」の和名を源順『倭名抄』は「加波々之加美」としているのに対し、深江輔仁の『本草和名』は「加良波之加美」とし、「加波々之加美」の方は「秦椒」の和名としている。これについて、狩谷椽斎の箋注は「源君所訓、恐誤」としている。『新撰字鏡』も「秦椒」は一字脱落しているが「加波自加美」としている。この判定は正しいように見えるが、現実にはゴシュユもサンショウも、どちらも「かははじかみ」と呼ぶ混同が暫く続くこととなっていく。

『類聚名義抄』*³⁵（観智院本）は、「ハシカミ」に「椒」字を当てる一方（仏

下本)、「カハハシカミ」には「呉茱萸」のみを当てる(僧上)といった区別の仕方をとっているが、例えば『延喜式』*³⁶ 典薬寮の次の二文においては、「呉茱萸」も「秦椒」も、どちらも「カハハシカミ」と訓読している。

遣諸蕃使…草薬八十種…蜀椒四斤、^{カハハシカミ}呉茱萸五升

諸国進年料雑薬…美濃国六十二種…^{カハハシカミ}秦椒、葵子各一斗五升

しかし、こうした混乱も、同じくミカン科で相互に近縁の「茱萸(呉茱萸)」と「椒」の間で起こっているに過ぎず、両者の形状も効用も相似しているので、大きな問題を生じない。ましてゴシュユは国内では栽培されておらず、乾燥された薬品としてしかお目にかかれなかったであろう時代のことである。漢語「茱萸」の受容については、まずは概ね正しく同定されたと見なして良いだろう。もちろんミズキ科に属し、分類上も形状も全く異なったグミとの混同は未だ起こった形跡はない。

上に引用した『延喜式』の「呉茱萸」は「草薬」として用いられるものだが、「呉茱萸」の辟邪の効能も、当時既に十分知られていたはずである。『續齊諧記』の費長房の故事は『蒙求』などを通して中国でも広く流布していたであろうことは既に述べたが、9世紀末、藤原佐世が編んだ『日本国見在書目録』雑伝家*³⁷には「續齊諧記三卷[呉均撰]」といった記述があり、これらの書物が平安貴族に読まれていたことを証している。現に重陽の習俗が宮中に入っていたことは、史書の記す所である。六国史にはほとんど毎年*³⁸、重陽節の行事が記載されているだけでなく、『延喜式』自体にも、

凡九月九日、呉茱萸廿把、附薬司供之。 [典薬寮]

薬司、九月九日、裹呉茱萸料、緋帛一匹、緋糸二絢 [中務省]

などといった記録がある。ただ、そうした折に用いられたであろう「呉茱萸」が舶来のゴシュユであったのか、あるいは「かははじかみ」として混同されていたサンショウであったのかは判然としない。舶載品の貴重であったことを思えば、代用品としてのサンショウが使われた可能性は高く、それ故にサンショウをも「か

ははじかみ」と称した可能性も十分に考えられる。否、もう一步踏み込んで言えば、こうした重要な本草で且つ辟邪の神草である「茱萸」に対しては強い需要があったはずであり、また薬効の優れた本草を有する先進文化への憧れも根底にあって、何とか身边にもそうした本草を見出したいという心理が働いていたであろうことは想像に難くない。その心理が、古来「はじかみ」と呼んでいたサンショウに対して、「茱萸」には「かははじかみ」の名を与えて両者を接近させ、また更に、「はじかみ」をも「かははじかみ」と呼ばせるに至ったのではなかろうか。こうして、日本在来のサンショウと「呉茱萸」との垣根を無くしておいて、儀式の「呉茱萸」（実はサンショウ）が調達されたのではないかと考える。

無論、この時点で既に「ぐみ」を用いて「茱萸」と称していたという証拠は今のところ見つからない。ところが、中世から近世にかけて様相が一変する。

ii) 中世・近世の「茱萸」

一条兼良の『公事根源』*³⁹ 九月重陽宴には、

御帳左右に茱萸の囊をかけ、御前に菊の瓶ををく、または茱萸の房を折りて頭にさしはさめば、悪気をさる…

の一段があり、続けて費長房の故事に言及している。『公事根源』は15世紀の書であるが、伝統を受け継ぐ故実のことであり、平安時代にもこれと大きくは異なることが宮中で行われていたと、上記『延喜式』などによっても想像される。ところが、ここに至って「茱萸」が、実際に使われた植物は依然としてサンショウの類かも知れないが、「ぐみ」と読まれた可能性が、わずかながら生じてくる。

『時代別国語大辞典 室町時代』*⁴⁰によれば、16世紀の『饅頭屋本節用集』など幾つかの資料では「茱萸」に「ぐみ」の訓が付けられているらしく、室町時代にはこうした読み方が一般化していた可能性が強くなる。また、少し時代が下って、江戸初期、17世紀前半の『毛吹草』初印本*⁴¹には、「苗代グミ萸」（二月）、「萸グミ」（八月）、「大井川オホイガハノグミ萸」（駿河）などが記されており、18世紀後半の『類聚名物考』*⁴²には次の記述がある。

茱萸袋　ぐみぶくろ　九月九日の節に、茱萸を袋に入れて腕にかけ、或ハ柱に付くこと、唐よりはじめて我が朝にも有ることなり、ぐみ袋ハ赤き緒にてするよしなり、菊のはたと茱萸とともにつつみたる古画などあり、…「茱萸」を「ぐみ」と読むだけでなく、重陽の辟邪に「ぐみ」を用いていることも、ほぼ間違いない。

それでは、こうした誤解の契機は何であったのだろうか。既に見たように「茱萸（呉茱萸）」に「ぐみ」との共通点は見あたらない。

IV. 本草としての呉茱萸、山茱萸、胡頹子

「茱萸（呉茱萸）」と「ぐみ（胡頹子）」の間に存在する共通点は、どちらも本草であることくらいである。「呉茱萸」に近縁の「食茱萸」においても、「ぐみ（胡頹子）」との共通点は皆無と言って良い。しかし、「茱萸」と名の付くものにもう一つ、「山茱萸」がある。『本草綱目』は「宗奭曰」としてではあるが、次のように記す。

山茱萸与呉茱萸甚不相類，治療大不同，未審何縁命此名也？

「山茱萸」と「呉茱萸」とは同じく「茱萸」の名を負うにも関わらず、その薬効などに全く似たところが無いというのである。しかし、『神農本草經』における両者の記載は極めてよく似ているので、以下に掲げる。（「呉茱萸」については前掲のものと同じ）

呉茱萸、一名藪。味辛，温，有小毒。主温中，下氣，止痛，欬逆，寒熱、除濕，血痺，逐風邪，開腠理。…根，温，殺三蟲。久服輕身。生山谷。

山茱萸　一名蜀棗。味酸，平，無毒。治心下邪氣，寒熱，温中，逐寒濕痺，去三蟲。久服輕身。生山谷。

前半の薬効にも相互に類似した語彙が見られるが、条、回、蟻の三虫を下すことは辟邪の力を保証するものであり、「久服輕身」とともに重要であっただろう

と推測される。「山茱萸」には「蜀棗」などの別名もあるが、恐らくは「茱萸（呉茱萸）」と似た薬効を持っていたために、「本物ではない茱萸」の意味で「山茱萸」と命名されたのであろう。ちょうど、水生植物の「芙蓉（ハス）」に対して、陸上の木本ではあるが花の形状が似ているということで「木芙蓉」などといった名称が与えられたアオイ科の植物に似ている。この「木芙蓉」は日本では省略されてフヨウが標準和名になっている。「山茱萸」が、「茱萸（呉茱萸）」の存在感の薄い日本で「茱萸」と略されることは自然の成り行きであろう。

昭和初期の代表的国語辞典『大言海』が「ぐみ」に「常ニ茱萸ノ字ヲ用キル…」と述べていることは、拙論冒頭に述べたが、この「…」部分を付加すると次のようになる。

ぐみ〔茱萸〕 常ニ、茱萸ノ字ヲ用キルハ、山茱萸ノ上略ナリ

「ぐみ」を「山茱萸」に同定し、その「山茱萸」の上略されたものをも「ぐみ」と訓ずるようになったとするのである。

なぜ「ぐみ」を「山茱萸」に当てたのかと言えば、この「山茱萸」が、「ぐみ（胡頹子）」と実に似た果実を着けるからである。李時珍は『本草綱目』の中で山茱萸の項に続けて胡頹子の項を設け、「山茱萸及桜桃，皆言似胡頹子」という陶弘景の言を紹介するとともに、「結実小長，儼如山茱萸」と述べている。

また、貝原益軒（1630～1714年）の『大和本草』*⁴³の山茱萸の項には、

京都ノ方言 ナハシロクミト云グミアリ。苗代スル時 実熟ス。中華ノ人云 是即山茱萸也…

という話が紹介されている。グミ科グミ属ナワシログミは「ぐみ（胡頹子）」の代表であるが、ミズキ科のサンシュユとは樹形に大きな違いがある。「中華ノ人」が誤認したのはその赤く下垂する果実の様子が酷似するからであろう。その上、サンシュユもやはり日本には自生せず、享保年間（1716～1736年）に移入されるまで栽培されることも無かったとされる。小野蘭山（1729～1810年）の『本草綱目啓蒙』*⁴⁴山茱萸の項には次のようにある。

(山茱萸を) 古ヨリ グミト訓ズルハ非ナリ 享保年中ニ漢種渡リ今世ニ多ク
栽ユ

益軒が紹介する「中華ノ人」は、日本人の知らないサンシュユの木を見つけた
と思い、勇んで教えてくれたもののようである。

『古事類苑』植物部^{*45} 食茱萸の項に引く『本草一家言』には、

呉茱萸、食茱萸、山茱萸、雖名同、物各異也、和邦、訓茱萸、為久美、故不
識者、誤解三種、以久美之属、非也、予分析之、山茱萸宜訓為久美、其佗、呉、
食二茱萸、皆椒属也、…山茱萸即久美之一種也、久美有三種、本草所謂胡頹
子、木半夏、及山茱萸也、山茱萸子似胡頹子、形長色赤…

などとある。まず、「茱萸」の名を持つものを三つ挙げて、その内の「山茱萸」
は「ぐみ」と訓ずべきと主張している。なぜならば、「ぐみ」に三種あり、「山茱
萸」もその中の一つだからであるとする。では、その「山茱萸」が「ぐみ」の一
種であるとする理由はと言えば、やはり、その果実の類似によっていることが分
かる。現代の分類法からすれば論外の誤解であるが、ここにも、国内に存在しな
い「山茱萸」を、身近に存在するものに見立てて納得しようとする心理が働いて
いると思われる。

「山茱萸 (サンシュユ)」はミズキ科の落葉樹で、早春の葉の出る前に黄色の
花を着けるので、庭木としても珍重されている。しかし、既述のように日本には
自生しなかったため、古代の日本人はせいぜい乾燥した果実を薬品として見るか、
文献や図版から想像するしかなかった。また、生薬としての山茱萸の果肉には、
蜀棗、肉棗、萸肉などの呼称もあり、「胡頹子 (ぐみ)」の果実の俗称 (野棗子、
土萸肉など) と近いものが多い。果実の形状が似ていたから当然ではあるが、こ
れも混同を助けたかも知れない。「呉茱萸」も「山茱萸」も、生きた樹木として
知らないことが、「茱萸」と「ぐみ」の混同を許容したようである。

V. まとめ

茱萸（呉茱萸）は重要な本草として、また、致神辟邪の植物として古代の日本人にほぼ正しく認識された。しかし、おそらく当時の日本には自生していなかったため、文献や伝聞によるか、乾燥した果実を入手するしか認識する方法がなかった。

ただ、「椒の属」としての知識もきちんと持っていたので、サンショウの類をもって代用したことは十分考えられる。サンショウの古名「はじかみ」に対置して、「茱萸」を「かははじかみ」と呼んだのは極めて合理的で妥当である。また、サンショウをも「かははじかみ」と呼んだことは、単に混同したと言うよりは、代用品から“代用”という意識を払拭させる効用があったかも知れない。つまり、サンショウを「茱萸」に誤解したのではなく、積極的に“見立て”て、同一視しようとした可能性が高い。

一方、「山茱萸」が、やはり乾燥生薬として舶来すると、これも日本列島には自生していなかったらしいが、果実の形状が酷似する「ぐみ（胡頹子）」がやがて、「山茱萸」に見立てられるようになった。或いは「山茱萸」を見知った半可通の中国人が来日し、「ぐみ」を見て「山茱萸」だと教えたかも知れない。現実には十分起こり得ることではである。いずれにせよ、「ぐみ」は「山茱萸」に誤って同定されてしまった。そして、その「山茱萸」が「茱萸」と省略されれば、「ぐみ」に「茱萸」の漢字を当てることになる。もちろん「茱萸」は元来「呉茱萸」のことであったが、「呉茱萸」の存在しない日本で「山茱萸」が「茱萸」の座を奪い取ってしまった。こうして「茱萸」は「ぐみ」と訓じられるようになったと推定される。「茱萸（呉茱萸）」を「ぐみ」と読むのは“誤り”であろう。そして、その“誤り”の背景には、「呉茱萸」も「山茱萸」も自生せず、乾燥した果実しか実物に接し得なかったという事情があった。

しかし、「ぐみ」を以て「山茱萸」に“見立てる”ことは、その前にサンショ

ウを「呉茱萸」に当てたことと同じく、優れた生薬への強い需要と先進文化への憧れが根底になくは起こり得ない。“誤り”の真の原因は、自らの文化を一段と高いものにしようとする積極的な意欲にあったと見なすことができそうである。

(2008年1月)

【注】

- *¹ 大槻文彦『大言海』第二卷、富山房、1933年。
- *² 例えば小学館『日本国語大辞典』の「ぐみ」の項は「漢名に茱萸を用いるのは誤用」と明確に指摘している。
- *³ 例えば『新明解国語辞典』第3版の「ぐみ」の頁は「普通、《茱萸・胡頹子》などと書く」と説明している。
- *⁴ 本稿の一部分についてのごく簡略な摘要は2007年11月3日に北京大学において開催された「第八回桜美林大学・北京大学共同シンポジウム」で「植物名から見た古代日本人の中国観」と題して口頭発表した。発表資料は北京大学亜州-太平洋研究院編『亜太研究論叢』第五輯に収載の予定である。
- *⁵ 文献からの引用に際しても、特に意味上の問題を生じない限りにおいて、漢字の字形を簡略体に改めた箇所がある。
- *⁶ 『古今要覧稿』は草木部「ぐみ」の項で「按にぐみ、ごみにして小子と云義なり」と述べている。
- *⁷ 前掲『大言海』には「くハ、黄^キノ転ニモアルカ（黄金、くがね）実^ミノ皮ニ、きらら色^{イロ}ノ斑アリ、小子ノ転カト云フ説ハ、オボツカナシ」とある。
- *⁸ pungens は刺があることを意味している。
- *⁹ 中国科学院植物研究所主編、科学出版社、1972年。
- *¹⁰ 京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』（臨川書店、1968年）から『箋注倭名類聚抄』を底本としたが『元和古活字二十卷本和

名抄』も本質的な異同はない。[]内は原典では小字。ルビは寺井。『和名抄』の引用については以下も同じ。

- * 11 東京美術、1970年。正徳5年刊本の影印
- * 12 『新井白石全集』第4。国書刊行会、1906年。
- * 13 段玉裁『説文解字注』（上海古籍出版、1981年）を底本とする。以下も、『説文』本文と「段注」は同書による。
- * 14 『説文』自身は十四篇下において「从申从乙」とし、束縛牽引の義とするが師與鐘などの古字形は「人」に従っている。
- * 15 段玉裁は『説文解字注』で「赤者、著其形也、豆之生也、所種之豆、必爲兩瓣、而戴於莖之頂、故以一象地、下象其根、上象其戴生之形。式竹切。三部。今字作菽。」と記し、「赤」を「菽」の原字とする。やはり、豆である。
- * 16 『詩経』唐風〔椒聊〕に「椒聊之實／蕃衍盈升／彼其之子／碩大無朋／椒聊且／遠條且」とある。なお、以下も含めて、十三経およびその注疏からの引用は『十三経注疏』（中華書局、1980年）による。
- * 17 「段注」原文は以下のとおり。「荼萊蓋古語、猶詩之椒聊也。單呼曰荼、纍呼曰荼萊、荼聊。唐風、椒聊之實、毛曰、椒聊椒也」
- * 18 朱駿聲『説文通訓定聲』藝文印書館、1994年。
- * 19 北京市中国書店、1982年。咸豊6年刻本の影印
- * 20 上海古籍出版、1999年。
- * 21 上海古籍出版、1997年。
- * 22 藤堂明保『漢字源』（学習研究社、1988年）によれば、「求」は糾（引き締める）・救（引き止める）・球（中心に引き締まった形のたま）と同系である。
- * 23 中華書局、2000年。
- * 24 前掲『詩経』唐風の鄭箋に「椒之性、芬香而少實、今一椽之實也。」とある。
- * 25 本文、王注とも、崔富章主編『楚辞集校集釈』（湖北教育出版、2003年）に依る。

- * 26 『続齊諧記』は漢魏叢書 63、古今逸史 24、などに収録される。ここに引用した費長房の故事は、『本草綱目』収録の文章であるが、故事の概容については諸書に異なるところが無い。
- * 27 陳貴廷主編『本草綱目通釈』（学苑出版、1992年）に依る。
- * 28 馬継興主編『神農本草經輯注』（人民衛生出版、1995年）に依る。
- * 29 『中薬大辞典』小学館、1985年。『本草綱目通釈』については*27参照。
- * 30 『日本の野生植物 木本』（平凡社、1993年）に依る。
- * 31 後述の『本草綱目啓蒙』には「享保年中ニ漢種渡ル…コノ木諸国ニ自生アリ、長州防州紀州殊ニ多シ、一種粒小ナル者アリ、今舶来ノ者、粒小シ」とあるが、上原啓二『樹木大図説』（有明書房、1961年）は、「本草啓蒙にこの種諸国に自生すと記すが日本のものは渡来品である…日本には享保年代に渡来した」とする。『採薬録』の「今處々ニ栽ル者即漢種也」などを引用し渡来説を述べる辞書類も多い。
- * 32 『平凡社大百科事典』、林弥栄ら監修『原色樹木大図鑑』（北隆館、1985年）、『中薬大辞典』、黎躍成ら『道地薬和地方標準薬原色図譜』（四川科学技術出版、2002年）などに依る。
- * 33 京都大学文学部国語学国文学研究室編『天治本新撰字鏡』臨川書店 1973年。ルビは寺井。以下も同じ。
- * 34 深江輔仁撰。日本古典全集（1928年）に依る。
- * 35 『五本対照類聚名義抄』（汲古書院、2000年。大槻文彦蔵寛政版の影印）に依る。
- * 36 新訂増補国史大系第 26 卷『交替式・弘仁式・延喜式』（吉川弘文館、1965年）に依る。
- * 37 『日本国見在書目録』（名著刊行会、1996年。宮内庁書陵部蔵室生寺本）に依る。
- * 38 『続日本紀』（『新日本古典文学大系 14』岩波書店、1992年）天平宝字 2 年 3 月の記事などによれば、この重陽の節会は大宝 2 年に一旦停止されたことも

あるが、大同2年に復活、嵯峨朝では3月3日の節会に準ずるものとされた。

- * 39 速見房常『公事根源愚考』（吉川弘文館、故実叢書、1928年）に依る。
- * 40 三省堂、1989年。
- * 41 松江重頼、ゆまに書房、1978年影印本。
- * 42 物集高見『広文庫』（広文庫刊行会、1936年）所引に依る。
- * 43 白井光太郎考註。春陽堂、1932年。
- * 44 杉本つとむ編『本草綱目啓蒙—本文・研究・索引—』早稲田大学出版部、1974年。
- * 45 吉川弘文館、1980年。